15 営農技術対策 号外

強風・降霜に関する営農技術対策

平成15年6月9日
農政部農業改良課

6月3日から4日にかけての強風と5日と7日の降霜により、一部地域で出芽後の小豆等に被害がみられる。豆類を再播する場合は、次の点に留意して行う。
また、6月6日付け札幌管区気象台発表の1か月予報では、6月14日から20日の1週間は、一時的に寒気の影響を受ける予報がなされております。

1 大 豆
被害症状からみて、生長点が正常で初生葉が半分以上影響を受けていない場合は、生存率が高いので、廃耕せずに生育は見守る。ただし、出芽期での除草剤は使用しない。
再播を行う場合は、できるだけ金時に切り替える。

2 小 豆
被害症状からみて、生長点が正常で初生葉が半分以上影響を受けていない場合は、生存率が高く、正常株の半分程度の莢数が期待できるので、再播せず生育を見守る。ただし、出芽期での除草剤は使用しない。
小豆での再播を行う場合は、早生種をは種しても成熟期が遅くなり早霜による被害の危険度が増し、収量も低下することから、出来るだけ金時に切り替える。

3 菜 豆
被害状況からみて、生長点が正常で初生葉が半分以上影響を受けていない場合は、生存率が高いが、その後に乾燥が続くと減収することがあるので、天候に注意する。
再播を行う場合は、手亡は小豆と同様に収量性が低下し、成熟期の遅延による早霜害の危険が増大するので、金時に限定し、早期には種を終了させる。
廃耕しない場合は、かさ枯病の発生が懸念されるので、適正な防除を行う。また、出芽期での除草剤は使用しない。

4 再播時における除草剤使用について
(1)除草剤を散布したほ場
a 再播後の除草剤の影響を避けるため、耕起または、深くロータリーをかける。
b 施肥は、基肥の30%程度とするが、リン酸吸収係数の高い土壌では、初期成育確保のため、リン酸施肥量を標準量に近づけることが望ましい。
(2)除草剤を散布していないほ場
a 同じ品種を再播する場合、新しい畝に古い畝が重なるように行う。
b 施肥は行わない。

5 は種の限界
小 豆:6月5日(早生品種 6月10日)
菜 豆:金時6月15日(早生品種 6月20日)
手亡6月10日